



知ってほしい、大腸がんのこと



消化器内科部長

田村 智
たむら さとし

大腸がんは、日本人がかかるがんの中でも罹患数^{りかんすう}が特に多い病気のひとつです。早期に発見できれば、治療の選択肢は大きく広がります。

近年、内視鏡治療の分野ではESD^{えいしきょう}（内視鏡的粘膜下層剥離術^{えいしきょうてきんまくかそうはくりじゅつ}）という技術が普及してきました。これは、特殊な器具を使って病変を内視鏡で一括して切除する治療法で、おなかを切る必要がなく、入院期間も比較的短く済むのが特徴です。以前は手術が必要だった大きさや形の病変でも、ESDによって体への負担を抑えた治療が可能になるケースが増えていきます。

一方で、がんの進行度や状態によつては、外科手術や抗がん剤治療が最も適した選択となることもあります。どの治療法が適しているかは、発見された時点でのがんの状態によつて決まります。そのため重要なのは、できるだけ体への負担が少ない治療法を選ぶ可能性を広げるこ

とです。大腸がんは初期にはほとんど自覚症状がなく、発見された時にはすでに進行しているケースも少なくありません。

便潜血検査は、痛みも食事制限もなく自宅で簡単に行える検査です。陽性^{やうせい}の場合は大腸内視鏡検査による精密検査が必要となりますが、「苦しそう」というイメージから検査をためらう方も少なくありません。現在当院をはじめ、鎮静剤を使用した検査を行っていることが多く、うとうとと眠っている間に終わるなど、苦痛を抑えた状態で受けていただけます。年に一度の便潜血検査を習慣にし、必要に応じて大腸内視鏡検査を受けることが、早期発見への確実な一歩となります。



ひょうたん池を通して 身近な自然を考える



ひょうたん池自然を学ぶ会
会長

竹原 保三
たけはら やすみ

ひょうたん池は名前のとおりひょうたん形をしており、周囲は約150メートルの池です。毎分約1・5トンの湧水量があります。水面の海拔は0メートル。集中豪雨・台風の大雨時には一気に水が溜まり周辺の道路までも水没することがあります。

「ひょうたん池自然を考えよう会」では、ひょうたん池の豊富な湧水を守り、その周辺の自然環境を生かした憩いの場づくりを進め、また、子どもたちにも自然を愛する心情や愛郷精神^{あいきやうせいしん}を高めたいと願って活動しています。定期的な整備活動のほか、地域の子どもの園外・校外学習の支援、東部小3年生の出前講座などを長年にわたって実施しています。また、今年5月には飼育舎内のホタル観賞を延べ1500人を超える人たちに楽しんでいただくことができました。

近年、会員の高齢化もあり、夏の厳しい暑さの中では整備作業が追いついていません。そのため、大量のボタン

ウキクサや水中の藻、泥が除去しきれず、濁度^{だくど}が増していることが大きな課題になっています。それでも会員の観察によれば、今年のイトトンボの発生は早く3月20日に見られました。カワセミはほぼ毎年会員が写真に収めています。このようにひょうたん池や周辺の水路で豊かな自然に親しむことができます。多くの人と触れ合うことを楽しみながら、身近な自然環境を大切にしていきたいと思っています。

